

## 2月15日(日) サムエル記第一21章7～9節

「その日、そこにはサウルのしもべの一人が主の前に引き止められていた。その名はドエグといい、エドム人で、サウルの牧者たちの長であった。」(7節)

7節には、サウルのしもべの一人としてエドム人のドエグのことが紹介されています。なぜサウルのしもべの一人として異邦人のエドム人がいるのか不思議に思うかもしれませんが、14章47節でサウルが敵として戦った中にエドム人がいて、恐らくドエグはサウルの捕虜となり、サウルに仕えることとなったのでしょう。そしてサウルの牧者たちの長とありますが、牧者たちとは指導者のことを指しています。ですからドエグは異邦人でありながら、サウルの信認を得ていたのかもしれませんが。そしてこのドエグが「主の前に引き止められていた」とあります。これは、恐らくドエグは、何かの事情があつてノブにいて、彼は主から何かの答えを得ようとして待っていたのでしょけれども、なかなかその答えが主から与えられなかったのではないかと思います。もちろん、彼が主に求めていたものが何かは分かりません。しかし、ここでのドエグについての短い記述は、多くの人が指摘していますし、私も昨日記しましたように、22章18、19節のノブの地における人々の虐殺を思い起させます。そしてダビデも22章22節で「私はあの日、エドム人ドエグがあそこにいたので、彼がぎつとサウルに知らせると思っていた。私が、あなたの父の家の者全員の死を引き起こしたのだ」と言います。もちろん誰にも分からないことではありますが、なぜノブにダビデが来た時に、ドエグがいることを主が許されたのかと思ってしまう。私たちも日々の歩みの中で、なぜと思うことが多くあり、なぜ主は、このことを許されたのかと思うこともあるでしょう。そのような時に、主になぜと理由を問うよりも、分からないことはすべて主におゆだねすべきです。なぜなら、主はすべてを最善に導かれるお方であることを信じているからであり、信仰により必ず後で分からせてくださる時があるはずで

## 2月16日(月) サムエル記第一21章10～15節

「ダビデは、このことばを気にして、ガテの王アキシシュを非常に恐れた。」(12節)

「ダビデはその日、ただちにサウルから逃れ、ガテの王アキシシュのところに来」ましたが、今回ダビデが来たガテは、当時のイスラエルの敵であったペリシテ人の都市国家の一つでした。これまでダビデは二回サウルのもとから逃れましたが、いずれの場合もイスラエル国内でした。恐らく国内にいてはいつサウルの家来に捕まるか分からないとの思いがダビデにあったのかもしれませんが。ですから国内を逃げ回るよりは、敵の地の方が安全と考えた可能性があります。そして、ダビデはガテの王アキシシュのもとへ来ました。敵の軍団の長を受け入れてくれるかどうかは分かりませんでしたし、アキシシュの家来たちは、すぐにダビデに気づき、「この人は、かの地の王ダビデではありませんか」と言いました。イスラエルの王は、この時はサウルであるにもかかわらず、なぜダビデを王と呼んでいるのかは定かではありませんが、ペリシテと同様にイスラエルにも都市国家があり、何人かの王が存在すると思ったのかもしれませんが。また「皆が躍りながら『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。』と言って歌っていたのは、この人のことではありませんか。」と言いました。完全にダビデの正体がばれてしまったのです。ですか

ら「ダビデは、このことばを気にして、ガテの王アキシュを非常に恐れ」ました。ダビデが敵の国に兵も引き連れられないのですから当然のことです。それでダビデはアキシュと家来たちの前でおかしくなったかのようにふるまい、捕らえられて気が変になったふりをしました。するとアキシュは、ダビデを自分のもとに連れて来た家来たちを叱ります。特に15節の「気がふれた者が不足しているともいうのか」とは、ガテには気がふれた者が多かったということではなく、家来たちが王である自分を侮辱しているのかというような意味で言ったと思われる。こうしてダビデはガテの王アキシュと家来たちの警戒心を解くことに成功しました。

詩篇34篇の表題を見ますと、アキシュではなくアビメレクと記されています。このことについてはいくつかの説が提示されていて、セム語系の名ではないかとか、名ではなく称号が用いられているのではないかなどと言われていますが、定かではありません。いずれにいたしましても、ダビデはガテの王アキシュの前でおかしくなったかのようにふるまわなければなりませんでしたが、そのことは彼にとってどれほどの屈辱だったのだろうかと思います。しかし、それでも1～3節を見ますと主をほめたたえています。また6節では「この苦しむ者が呼ぶと 主は聞かれ すべての苦難から救ってくださった。」と言います。決して自分の策略によって助かったとは言わず、あくまで主によって自分は救われたと主の助けを強調しています。私たちも日々さまざまな苦難を経験します。ダビデのように理由もなく苦しめられることがあるかもしれません。しかし、主はどんな苦難の中からも私たちを救い出してくださいます。自分で何とかしようとするのではなく、主に頼り、祈りをもって主に呼ばわりましょう。そして苦難から救い出してくださいる主をどんな時にもほめたたえましょう。

## 2月17日(火) サムエル記第一22章1～5節

**「神が私にどのようなことをされるか分かるまで、どうか、父と母をあなたがたと一緒に住まわせてください。」(3節)**

ガテの王アキシュと家来たちに自分の正体がばれたので、いつまでもここには危険だと思ったのでしょう。そこを去って、アドラムの洞穴に避難しました。アドラムは、ガテとベツレヘムの間にありますので、ベツレヘムにいた彼の兄弟たちや父の家の者はみな、これを聞いてダビデのところへ下って来ました。それだけではなく、困窮している者(サウルの統治下で抑圧されている者)負債のある者、サウルに対して不満のある者たちが、ダビデのもとに集まって来て、彼は人々の長となりました。その数は四百人になりました。そしてダビデはモアブのミツパに行き、そこでモアブの王に、神がどのようなことをされるか分かるまで、父と母と一緒に住まわせてくださいと頼みます。ここでダビデがモアブへ行ったのは、曾祖母であるルツの影響が大きかったのでしょう。そして預言者ガドの「この要害にとどまっていないで、さあ、ユダの地に帰りなさい。」とのことばに従い、ダビデはハレテの森へやって来ました。

3節でダビデは、「神が私にどのようなことをされるか分かるまで」と言います。ここにダビデの神への信仰を見ることができます。神は、苦難の中を通されながら導いてくださり、最後にはみわぎをなされて、主なる神であるご自身がほめたたえるようにしてくださると信じていたのです。私たちも、自分がなすべきことをしたなら、後は神がどのようなことをされるか分かるまで静かに待つ信仰が必要です。時には忍耐が必要であり、いつ主がみわぎをなされるか

分かりませんから、不安になることもあるでしょう。しかし、そこに私たちの信仰が試されるのです。主は真実なお方であり、決して信じる者を捨てる方ではありません。そのことを信じましょう。

## 2月18日(水) サムエル記第一22章6～10節

**「それなのに、おまえたちはみな私に謀反を企てている。息子がエッサイの子と契約を結んでも、だれも私の耳に入れない。おまえたちのだれも、私のことを思って心を痛めることをせず、今日のように、息子が私のしもべを私に逆らわせて、待ち伏せさせても、私の耳に入れない。」**  
(8節)

サウルは、ダビデと彼とともにいる者たちが見つかったことを聞きました。サウルは、そばに立っている家来たちに、エッサイの子、すなわちダビデが論功行賞として土地をくれたり、手柄をあげれば、それに報いて千人隊の長や百人隊の長に任じるだろうかと言います。つまり、王である自分でなければそのようなことはできないし、これまで自分は家来たちに十分報いたとの自負もあったのでしょうし、それを恩着せがましく家来たちに訴えているのかもしれませんが。8節の息子とはヨナタンのことです。つまり、ヨナタンとダビデが契約を結んでも、誰も自分の耳に入れないと言ひ、その息子ヨナタンのことで心を痛めても、だれも自分のことを思って心を痛めず、ヨナタンがダビデをサウルに逆らわせて、待ち伏せさせても私の耳に入れないと言います。つまり、どこでダビデが待ち伏せているか分からず、またいつ自分の命をねらうか分からないと思っていたということであり、しかも息子であるヨナタンがダビデに王に対して逆らうようにさせたのだとも言ひ、息子ヨナタンにまで疑心暗鬼になっていたことが分かります。王という立場にあり、権力や名声を手にしても、忠実なしもべであり、娘婿であったダビデや実の息子のヨナタンさえ信用できない状態が本当に幸せだったのだろうかと思わされます。そのようなサウルの言葉を受け、エドム人ドエグが、ダビデがノブのアヒメレクのところへ行き、そこで食糧を得、ゴリヤテの剣を得たことを告げます。自分の忠臣ぶりをサウルにアピールしたかったのかもしれませんが。

サウルの今の現状は、ある意味自業自得でした。もしサウルがダビデの命をねらうようなことをしなければ、決してダビデはサウルのもとを去ることはしなかったでしょうし、ヨナタンもサウルと良い親子関係を築いたはずです。私たちは、自分に起こったことについても考えてみることも必要です。サウルのように自分の罪や過失によって引き起こされている問題はないでしょうか。もしそれに気がついたなら、私たちは主と和解するとともに、周りの人とも和解をして良い人間関係を継続すべきです。

## 2月19日(木) サムエル記第一22章11～19節

**「そこでエドム人ドエグが行って、祭司たちに討ちかかった。その日彼は、亜麻布のエポデを着ていた人を八十五人殺した。」**(18節)

サウル王は、エドム人ドエグの報告を受け、人を遣わして、アヒメレクとノブにいる祭司たちを呼び寄せました。13節においてアヒメレクがサウルに謀反を企てたという事実はありま

せんし、ダビデのために神に伺うということもしていません。完全にサウルはアヒメレクを反逆者と決めつけています。アヒメレクは王に答えて、まずダビデは家来の中で最も忠実な者だと言います。次にダビデは王の婿でありというのは、王室に属する者の頼みごとを簡単には断れないということです。三つ目が、護衛兵の長であり、サウルの家で重んじられていると言います。つまり、彼が高い地位にあるのは、サウル自身がダビデを重んじて、取り立てているからではないかということです。そして頼まれれば祭司という立場上、主に伺うことはするし、決して謀反を企てているということもなく、ダビデがサウルに追われていることも知らなかったと訴え、自分たちの無実を主張します。しかし16節でサウルは、そこにいる全員に死刑を宣告します。そして近衛兵に祭司たちを殺すように命じます。しかし、王の家来たちはサウルの命令に従って祭司たちを殺すことを躊躇します。一つは明確に罪を犯したとまで言えない祭司たちを殺せないと思ったことと、主に仕える祭司たちを殺すことを恐れたからです。これは祭司たちが仕える主への恐れとも言えます。しかし異邦人ドエグは、サウルの命令に従って祭司たちに討ちかかり、八十五人を殺しました。再び自分のサウルに対する忠誠心を示そうとしたからでしょうか。サウルが命じていないにもかかわらず、19節でノブの男も女も、幼子も乳飲み子も、家畜まで剣の刃で討ちました。

サウルの主に対する恐れのはなさは、主に仕える祭司たちの虐殺によく現れています。私たちも、もし主に対する恐れを欠いているなら、教会や主に仕える者たちや周りの兄弟姉妹への態度により明確に現れます。むしろ主への恐れは、教会において周りの兄弟姉妹への謙遜さに現れます。私たちの主への恐れは、かたちとして現れているのでしょうか。

## 2月20日(金) サムエル記第一22章20～23節

### 「私が、あなたの父の家の者全員の死を引き起こしたのだ。」(22節)

アヒメレクの息子のエブヤタルが、殺戮の現場から一人逃れてダビデのところへ逃げて来ました。そして、エブヤタルは、サウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げました。それを聞くとダビデは、ドエグがあそこにいるのを見たこととサウルに知らせるにちがいないと思ったことを話します。そして、「私が、あなたの父の家の者全員の死を引き起こしたのだ」と祭司たちの死の責任を自分がかぶろうとします。そしてエブヤタルに自分と一緒にいるように言います。

祭司たちの死の責任が自分にあるかのように語るダビデの姿に彼の謙遜さを私たちは見ます。祭司たちの殺害の責任は、祭司たちを殺すように命じたサウルとその命令を実行したエドム人ドエグにあるのであって、ある意味ダビデには責任はないように思えますが、彼は自ら責任を負おうとします。私たちも教会で何か起これば、なるべく自分は関わりたくないと思ってそこから逃げる傾向があります。しかしダビデのように主への信仰から自ら責任を負うこともあってもいいのではないかと思います。またダビデ自身もサウルの手から逃れようとして危険な状況にあるにもかかわらず、エブヤタルの身の安全を保証しようとしています。たとえ自分がどうあったとしても、積極的に弱者の安全を守ろうとするダビデの信仰を見ることができます。私たちも助けを必要としている人に対して手を差し伸べることに躊躇することはないでしょうか。積極的に人を助けることで、私たちも自分の信仰を証ししてまいりましょう。

## 2月21日(土) サムエル記第一23章1～6節

「ダビデは主に伺って言った。「行って、このペリシテ人たちを討つべきでしょうか。」主はダビデに言われた。「行け。ペリシテ人を討ち、ケイラを救え。」(2節)

ダビデのもとにペリシテ人がケイラを攻撃して打ち場を略奪していますとの知らせが届きます。打ち場を略奪するという事は、ちょうど収穫の時期にケイラの人々が食糧を略奪されたということなのでしょう。ケイラの人々は食べる物がなく、まさに死活問題です。2節でダビデは、ケイラを攻めに来たペリシテ人を討つべきか主に伺います。そうしますと、主は「行け。ペリシテ人を討ち、ケイラを救え」と言われました。ダビデ自身も自分の命をねらうサウルの手からの逃亡の身でした。そのような事情を言い訳にして、彼はペリシテ人がケイラに攻めて来たことについて関わらないようにすることもできたはずですが、しかし、ダビデは決してそのようなことを言い訳にせず、もし主のみこころであればペリシテ人を討とうとしたのです。私たちが主のために何かすべきことがあっても、ありとあらゆることを言い訳にして、行っていないことはないでしょうか。今から主のみこころを伺ってみませんか。

しかし3節を見ますとダビデのもとにいた者たちは反対します。これは当然の反応です。ケイラに行くというのは、まさにサウルに自分たちの居場所を知らせるようなものだからです。そうしますと、ダビデは再度祈ります。決して自分の考えを押し付けるわけではなく、また人の言葉に左右されて迷うのでもなく、そばにいた者たちの意見を考慮して再度祈りました。主のみこころを求めて祈り直すことは、主の御前に慎重な態度であり、決して不信仰ではありません。むしろ何度もみこころを求めて祈ることにより、ますます確信を持つことができます。そして5節を見ますと、主のみこころのとおりダビデは略奪されたものを奪い返し、ペリシテ人を討って大損害を与えました。主は必ずみこころをなしてくださり、信じて従う者に必ずみわざを見させてくださいます。